

『西儒耳目資』編纂過程推測の手がかり

著者	太田 斎
雑誌名	神戸外大論叢
巻	48
号	2
ページ	61-72
発行年	1997-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001586/

『西儒耳目資』編纂過程推測の手がかり

太 田 齋

§. 1 問題提起

『開篇』 vol. 15 所載の拙文、太田（1997）末尾の補記で『西儒耳目資』編纂過程について次の様な指摘を行った。

『西儒耳目資』は『洪武正韻』の一字一字に音注を施して、それをバラバラにして発音辞典に相当する『列辺正譜』を編んでいるようである。それで全てが説明できるという訳ではないが、『列辺正譜』に収録されている（隠僻な）又音のかなりの部分は『洪武正韻』に由来するといつてよい。だからそこに反映する音韻体系は現実の方言音或いは規範音に拠っているにせよ、『列辺正譜』所載の字音は全てが当時の口語音という訳ではない。（p. 149）

実はこの指摘は本稿筆者の創見ではない。既に服部四郎（1946）に次のような記述が見られる。

…洪武正韻と本書（即ち『西儒耳目資料』一本稿筆者注）とを比較すると、微細な點にまで多くの一致が見出され、ことに二つ以上の支那語音を表わす漢字においてはその支那語音の種類及び数が兩書において偶然とはいへないまでに一致してゐる例が多い。洪武正韻に無い字や字音を韻會小補によって補った例も多少はあるが、正韻に存在した度は極めて高い。勿論箇々の聲母や韻母の表記は洪武正韻から離れて當時の北方音

に依って居り、たとへば陽聲の韻尾は -n (= [n]) と -m (= [ŋ]) と區別するのみであるなど数々の點でさうであるが、それにも拘らず、この書は洪武正韻を当時の北方音によって解釋したものと概略的にいへるのではないかと考へてゐる。(p. 65)

服部 (1946) には残念ながら自説を裏付ける具体的なデータは挙げられていない。上記の拙文においても主たる論点から離れるので、このとき具体的な根拠は挙げなかった。その後、『開篇』編集部より論拠を挙げるよう指示を受けたので、本稿を以て簡単な論拠の例示を行うことにした。本来ならば、『開篇』に発表すべきところであるが、『開篇』編集部の許しを得て、『神戸外大論叢』に掲載の場を求めることにした。実のところ上述の指摘及び本稿で以下に挙げる論拠の一部は既に小さな研究会で発表したことがあるが、⁽¹⁾その後ほったらかしにして調査を完了させるに至っていない。従って現時点においても、挙げるデータは依然断片的なものである。将来、網羅的なデータを利用できるようになった暁に本稿の論旨に大きな修正が余儀なくされることがあるかもしれない。特に『西儒耳目資』に大きな影響を及ぼしていると考えられるもう一点の『韻會小補』(『古今韻會舉要小補』) についてはほとんど調査が進んでいない状態である。この書についての調査の完了を待たねばならないのだが、とりあえずは現状報告ということで要求に応じておきたい。

§. 2 『西儒耳目資』に見える韻書名

『訳音首譜』には次のような記述がある。

『邊正後譜』, 字字有數。乃指卷卷張張之幾。數者有二。上數在中字之下者, 指『洪武正韻』而言。下數在西字之下者, 指『韻會小補』而言。

(1) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクトの一つ、辞書編纂プロジェクトの中国語音韻資料研究部会(第2回)で「近世音研究上の一問題——西儒耳目資に反映する方言層について——」と題する発表であった(1989.12.26)。

指毎數一方之内、又有二。右者指卷、左者指張。蓋『洪武正韻』者、天下通用之書也。『韻會小補』者、譯義較諸家獨詳。旅人寶之、以發我蒙。但其表以小補、謙也。余嘗謂其書稱爲大全可矣。 102a

引用箇所を示す102aは第102頁オモテの意。以下引用箇所を掲示する場合、aでオモテ、bでウラを表わす。『列辺正譜』中の掲出字のすぐ下にある数字は『洪武正韻』における出現箇所、その下はローマ字による注音、最下段の数字は『韻會小補』における出現箇所を示している。数字はどちらも割り注のように2行になっており、左が巻数、右が頁数を意味しているということである。同主旨の指摘は『列辺正譜』(4b)にもみられるが、こちらには『韻會小補』を顕彰するコメントはない。なお、本稿で用いる『洪武正韻』のテキストは世界書局影印『永樂大典』(1962.2)の巻首に付されたものによるが、韓国亞細亞文化社影印(1973.6)の朝鮮本も参照した。管見の及ぶ限りでは、朝鮮本以外のテキストは頁数、字配りなど全く同じと言ってよく、『列辺正譜』所拠『洪武正韻』と頁数が完全に対応する。『韻會小補』は架藏本(三台館藏板)。

『西儒耳目資』には他に『沈韻』(=劉淵『壬子新刊禮部韻略』)、『等韻』(=韓道昭『五音集韻』)、『中原音韻』などの書名が見られ、様々な先行韻書、字書を参考にしたことが窺えるが⁽²⁾、上の記述からも、とりわけ『洪武正韻』及び『韻會小補』に負うところが大きいことが分かる。『洪武正韻』を真っ先に挙げねばならぬのは明代の韻書の宿命であるから、割り引いて考える必要があるが、やはり主として『洪武正韻』及び『韻會小補』の二書に範を採っているものと考えて大過なからう。

実際、『洪武正韻』所載の字で『列辺正譜』に見えない字はほとんど無い。

(2) 『沈韻』、『等韻』二書の書名の同定については、羅常培(1930)参照(p.294)。劉淵の書が当時利用できたとは思えない。『韻會小補』の分韻が劉淵の平水韻に従っているところから、実際には『韻會小補』を代用したものであろう。なお『中原音韻』も書名を表しているのではないかもしれない。書名であるにせよ、『中原音韻』を嚆矢とする曲韻系韻書の総称のような用いられ方で、周德清の『中原音韻』を指しているのではないようである。

『列辺正譜』が『洪武正韻』及び『韻会小補』の索引のような役割をもっているのであるから、このことは当然と考えられるが、服部(1946)の指摘する如く、『列辺正譜』所載の漢字に付された様々な字音が『洪武正韻』と微細な点まで一致することは当然の帰結とは言えまい。この『列辺正譜』には奇妙な字音が多く収録されている。それらは概ね『洪武正韻』及び『韻会小補』に見られる協韻の字音を自らのシステムでローマ字化したものにすぎない。本稿ではそれらの一端を指摘する。

1. 乃 kù, kù, ím 『列辺正譜』22b
cf. 乃 …○又清韻怡成切。見羸字下。 『韻会小補』虞韻 3—43a
2. 諱 hū, hú, hiào 『列辺正譜』98b
cf. 諱 …○肴韻虛交切。 『韻会小補』遇韻 18—35a~35b
3. 膾 hū, vù, moêi, mùi 『列辺正譜』51b
cf. 膾 …○灰韻莫杯切。見膾字下。 『韻会小補』虞韻 3—60a
4. 輿 iù, iù, iùm, kuéi 『列辺正譜』120a
cf. 輿 …○麌韻勇主切。…○寘韻求位切。見輿字下。
『韻会小補』虞韻 3—39b

上掲例の下線を引いたもの以外は『洪武正韻』に対応する字音を求めることができる。そして下線を引いた字音は『韻会小補』にその典拠を求めることができる。3. の moêi, mùi は同一起源の字音の地域的変異体、即ち方音の兼収と考えてよかろう。但し、この二者のいずれが基礎方言の形式なのか今のところ不明である。「膾」は『洪武正韻』では灰韻莫杯切の小韻に収められており(2—24a 代表字は「枚」)、この小韻に所属する全ての字(20字)は moêi, mùi の音を持つ。

以下にもう少し『洪武正韻』における同一小韻所属字が『列辺正譜』において等しく複数の方音を収めていると考えられる例を『洪武正韻』に即して

挙げてみよう。以下の『洪武正韻』に関する挙例では、○は直後の字が『洪武正韻』における小韻代表字であることを示す。漢字は『洪武正韻』の掲出字順に配列し、複数行にまたがる場合は『洪武正韻』に従い、改行している。その場合、被注字の字配りも『洪武正韻』に合わせている。本稿において、一行で掲示できない場合は次行の先頭にLを付して、原文では一行であることを示す。但し反切は（ ）に入れて付すが、各字のそれ以外の訓積部分は省略する。

5. ○崇（鉏中切）*čhûm, çûm*

崇 *čhûm, çûm*

『洪武正韻』東韻 1—8b

6. ○春（書容切）*xûm, čhûm*

椿 *xûm, čhûm* 忪 *xûm, čhûm* 躡 *xûm, čhûm* 躡 *xûm, čhûm*

L躡 *xûm, čhûm,*

『洪武正韻』東韻 1—10b

7. ○煨（烏魁切）*uēi, goēi* 隈 *uēi, goēi* 畏 *uēi, goēi*

根 *uēi, goēi* 緹 *uēi, goēi*

隈 *uēi, goēi* 威 *uēi, goēi*

威 *uēi, goēi*

威 *uēi, goēi* 透 *uēi, goēi* 委 *uēi, goēi* 倭 *uēi, goēi*

倭 *uēi, goēi* 萎 *uēi, goēi* 痿 *uēi, goēi* 痿 *uēi, goēi*

『洪武正韻』灰韻 2—20b

6. の例の *xûm* は反切から割り出した人口的な字音である可能性も否定できない。『漢語方音字匯』（1962）によると「春」が摩擦音で現れるのは蘇州方言のみである。⁽³⁾

(3) 第二版(1989.6)では温州方言でも現れている(蘇州 *soŋ⁴⁴* (陰平); 温州 *çyo⁴⁴* (陰平); *tc'yoŋ⁴⁴* (陰平) 新 p. 363)。なお同一小韻に属する他の5字は同書には収録されていない。

春 son⁴⁴ (陰平)

p. 267

『江蘇省和上海市方言概況』(1960)によれば、如皋、南通、蘇州、無錫、常熟、常州、松江といった地点で、「春」が摩擦音で現れている。

如皋 son²¹ (陰平)

南通市 sʌŋ²¹ (陰平)

蘇州 son⁴⁴ (陰平)

無錫市 son⁵⁵ (陰平)

常熟 son⁵³ (陰平); ts'on³²⁴ (陰平)

常州市 son⁵⁵ (陰平)

松江 son⁵³ (陰平)

p. 564

この中にはいわゆる下江官話区の方言も含まれているから、北方音を反映するとされる『西儒耳目資』に見える xūm が、現実の方言の反映である可能性も無論あるが、いずれも声母は [s] であって、そり舌の [ʃ] で現れている例が皆無であることは注意すべきである。また呉語的要素が取り込まれて『西儒耳目資』の体系中に一字音としての地位を獲得しているとの見方も可能である。ただし、この場合においても声母が s [s] ではなく、x [ʃ] である点がやはりやや不自然である。

§. 3 『洪武正韻』利用の証拠

『洪武正韻』に『列辺正譜』の該当する字音を振り当ててみると、他に次のような面白い事実が見いだされる。

8. 寒 (河干切) hān

韓 hān

汗 hān

邯 hān 翰 hān

韓 hān

幹 hān

豨 (俄寒切) hān 豨 hān

『洪武正韻』寒韻 3—14a~14b

cf. 豨 …○寒韻河干切胡地野犬似狐而小…○又俄寒切…

『韻会小補』翰韻 21—20a

9. ○美 (莫賄切) mi, mùi, moèi 嫩 mùi, moèi 洩 mùi, moèi

L 每 mùi, moèi

痲 mùi, moèi 膁 mùi, moèi 肱 mùi, moèi

眯 mùi, moèi ○ 灌 (取猥切) mùi, moèi, çùi

L 璫 mùi, moèi, çùi

璫 mùi, moèi, çùi 洒 mùi, moèi çùi 絳 mùi, moèi, çùi

『洪武正韻』賄韻 8—10a

cf. 麥尾 mùi 美浼痲膁每漢嫩灌璫璫眯洒絳 『列音韻譜』92b

cf. 麥偉 mòei 美浼痲膁每漢嫩灌璫璫眯酒 (当作洒) 絳

『列音韻譜』132b

10.

○憾 (胡紺切) hán

感 hán 琯 hán 含 hán

(1 行掲出字なし)

哈 hán

暗 (烏紺切) hán, gán 闇 hán, gán 曖 hán, gán 菴 hán, gán

『洪武正韻』勸韻 13—28a

cf. 黑嘆 hán 翰旱悍汗瀚瀚翰埠駁駟扞捍干閑

鈎鏗駮戡漢滅嘆嘆感感琯含哈哈

含荅暗闇曖菴

『列音韻譜』51b

11.

○霸 (必駕切) pá

伯 pá

(1 行掲出字なし)

灞 pá

灞 pá 靶 pá 弣 pá

把 pá ○噯 (所嫁切) pá, xá 沙 pá, xá

『洪武正韻』禡韻 13—1a~1b

cf. 百罵 pá 霸伯灞灞靶靶檣靶灞把噯沙把

穉罷伯

『列音韻譜』2b

12. ○眨 (悲檢切) pièn 辨 pièn

○

颯 (職琰切) pièn, chièn, chèn

『洪武正韻』琰韻 9—37a~37b

cf. 百眼 pièn 扁匾扁偏編編誦眨臉辨導颯(扁(辯

編(編(辨扁辯

『列音韻譜』121a~121b

13.

○晒 (矢忍切) xìn

矧 xìn

○牝 (婢忍切) pìn, pìn, xìn

牘 pìn

『洪武正韻』軫韻 8—14a

cf. 石引 xìn 沈孀暉審案淦諗晒歎明矧牝牝

(蜃娠(腎(脈賑脰(蠶(甚黠樞(甚

『列音韻譜』84a

14.

○噓 (許御切) hiú

煦 hiú

洵 hiú

洵 hiú

洵 hiú

吁 liú

○慮 (良據切) liú

鏞 liú 鏞 liú 勳 liú

慮 liú 慮 liú 慮 liú

錄 liú

寰 liú

屢 liú 婁 liú

婁 liú

『洪武正韻』御韻 11—5b~6a

15.

○艮 (古恨切) kén

○硯 (苦恨切) kén 琅 kén

『洪武正韻』震韻 11—38b

cf. 琅 …○又震韻古恨切

『韻會小補』真韻 4—65b

cf. 格戰 kén 良硯琅

『列音韻譜』62a

る。8. は『洪武正韻』に小韻代表字に付くはずの○が欠けていたため、誤ってその前の小韻と同音と見なされた例である。世界書局影印本、朝鮮本以外のテキストでもこの○は欠けているようである。この当該反切に対応する字音表記は gān となるべきところであるが、この小韻所属の 2 字について『列辺正譜』、『列音韻譜』のいずれもこのような字音を収めていない。『韻会小補』も『洪武正韻』を利用するに当たり、同様の誤りを犯しており、『洪武正韻』で直前に位置する小韻の反切（河干切）を採っており、あるべき反切（俄寒切）は付けたしのように収められている。hān が『韻会小補』に基づいた結果とも解釈できないことはないが、それでは gān が収められていないことを説明できない。やはり『洪武正韻』に拠った結果と見なすべきであろう。14, 16. 以外はいずれも小韻を隔てる○を見逃して、○以前の字音表記を○以降にまで振ってしまったものと考えられる。14. は恐らく前行最下部にある「吁」を行を誤って、次の良據切の小韻に所属するものとしてしまったものであろう。上掲例の15. 以外、つまり 9~13. は正しい字音も同時に収めているから、このような作業は（恐らくは複数人間によって）同一箇所について 2 度以上行われたということなのかもしれない。何故、このような兼取状況が生じるのか、まだ十分な説明はできない。10. は世界書局影印本では「暗」の直前の○を欠いていて、こういった現象との関連が予想されるところであるが、他のテキストでは欠けてはいないようである。9~14. については『韻会小補』所録の又音で説明することはできない。なお、9. で『洪武正韻』と『列音韻譜』の間に掲出字の順序に不一致が見られることについては理由が分からない。12. の『列音韻譜』中の「臉」は『韻会小補』琰韻 16—51a~51b に「貶…集韻或作臉。亦作辨。」とあるところから、「臉」の誤りであることが知れる。15. は「○硯（苦恨切）kén, 琅 kén」とあるべきところだが、この 2 字は「kén」しかない。「琅」については『韻会小補』に「古恨切」があるところから、これに従ったものとも考えられるが、「硯」の方は『韻会小補』に見えない。『列音韻譜』62a には「kén」

がないため「kén」が「kén」の誤りである可能性もあるが、そうであるならば今度は先頭の「良」が有気音となり、『洪武正韻』と合わなくなってしまう。「良」は『韻会小補』にも「kén」に当たるような音注は見出せない。『列音韻譜』の3字の配列が『洪武正韻』と一致しているところから見て、これもまた『洪武正韻』によって字音をひねりだした例と見なしてよいであろう。15. はその反切からすれば、çiúnとならねばならないところ、同一小韻所属字が一律にçiúnと誤っている例である。『列音韻譜』でも一律にçiúnとなっており、çiúnは該当字がない。先行韻書では逆に稔韻（合口）三等清母字の該当例を欠いており、このçiúnが何らかの実在した方音の反映とは考え難い。恐らくは有気、無気の対立のペアの一方を欠いているために、çiúnとすべきところ、もう一方のçiúnに誤ったものであろう。或いは同じ声符「夂」を有する字を多く含む16'. の小韻との混同を考えてもよいかもしれない。このような一小韻所属字の全てに同様の誤りが生じるのもまた『洪武正韻』に基づく故である。

この他、既に陸（1947 p.116）、藤堂（1952 p.102）で指摘されていることだが、全濁上声字の圧倒的多数が無声無気の上、去声で現れるのも『洪武正韻』に依拠した結果であろうと思われる。この現象の解釈については、両論文とも中古全濁上声の上去両読として捉え、前者は官話音系成立過程上の過渡的状态を示すものとし、後者は方言音の兼収とする。しかしながら、このような上去両読は『洪武正韻』そのものに存在する。『西儒耳目資』に見られる上去両読は、実は『洪武正韻』に振った音声表記を整理したことから生じたもので、全濁上声字で『洪武正韻』及び『韻会小補』に去声の又音を持たないものは『西儒耳目資』においても去声の又音は存在しない。つまり『西儒耳目資』において全濁上声字は規則的に無声無気の上声で現れていると考えられる⁽⁵⁾。この例外、即ち『洪武正韻』及び『韻会小補』に去声の又音

(5) 無声有気去声の対応形式も皆無。この例外は無声有気の上声で現れる。具体的な例示は今ここでは行わない。この点については稿を改めて論ずる予定でいる。

を持たない全濁上声字で、『西儒耳目資』において去声の又音を持つものは「菌 kiùn, kiún」と「犯 fàn, fán」の僅か2例にすぎない。逆に言えば、『西儒耳目資』所収の中古全濁上声字に見られる無声無氣の去声という対応形式のうち、『洪武正韻』（及び『韻会小補』）によって説明することのできないものはこの2例のみということになる。『五方元音』に反映する河北堯山方言でも全濁上→上となっているから、『西儒耳目資』もこのような方言音を兼収したのであろうとする藤堂（1952）の指摘はなおも無視することはできないが、この現象もまた『洪武正韻』利用の結果であると考えた方がより多くの事実を統一的に解釈できる。恐らくは『西儒耳目資』の基礎方言では実際には全濁上→無声無氣上声ではなく、全濁上→無声無氣去声となっていたが、『洪武正韻』に依拠したために全濁上→上という様相を呈するようになってしまった。「菌」と「犯」の2例に見られる去声の形式は先行韻書に典拠を求めることができないものであれば、これこそが基礎方言の特徴の現れ、と考えるべきであろう。

（待続）